

日本文明研究の必要

文學博士 井上哲次郎

私は今回加藤博士等によつて明治聖徳記念學會が開かれ、我邦の神道并にその文明が西洋に紹介せらるゝのを賛成する者であります。御依頼により今日出席致しましたが、目下文科大學の試験に際して居りまして、多忙中十分準備が出来ませず、即座の思付を御話し致す次第であります。

新しい思付といふのではありませぬが、「日本文明研究の必要」と題して加藤君の演説を他の方面から補はうと思ふのであります。私も東洋學を研究して居りますから此會に關係ある方面を申し上げます。

私は二回萬國東洋學會に出席致しましたが、猶太教基督教の方面は該學會でも中々に盛んであります。然し極東の部即日本支那南洋等の方は出席者も少く微々として振ひませぬ、特に日本研究の學者は極めて少かつたやうでありました。文學博士高橋(順次郎)君も亦昨年同會に出席せられ、先頃歸朝せられました。其話によりますれば日本に關しての會合は殆んど無かつたといふことであります。是は其開會地たる希臘が戰爭中若くは戰爭準備中でありましたから、學會準備の餘裕がなかつたからであります。獨逸の如き學問好の所でも日本研究家は從來少かつたのみならず、今も尙ほ少ないのであります。

ます。然し獨逸の學者は追々日本に着目するやうになりました、加藤君も御話になつた彼ランプレヒト氏は私に書狀并びに著書を送つてくれましたが、氏は非常に日本研究に熱心でありますが、氏は我國語に通せず日本人の助手に由つて研究してゐるといふ位で、日本研究は歐人にとりては非常に困難な事でありませぬ。

獨逸の各大學に印度の梵語の講座はありますが、日本に關するものは一つもありませぬ。支那に關するものは伯林大學にあります、梵語の研究は日本や支那よりも遙かに進んで居ります、それは地理上印度は歐洲に近きのみならず、人種上歐人特に獨逸人等は印度と親密なる關係がありまして、人種言語皆親類であるからであります、従つて梵語を研究するのは自分共の祖先の事を研究することになるといふので之れについては大に趣味を持つてゐるのであります。之れに反して日本や支那の事は歐洲人とは言語人種を異にし、地理上も隔つて居りまするところから、其研究は進まないものであらうと思ひます。然し日本は清國のみならず、露國に打ち勝つに及んで、大いに彼等の注意を惹き起し、日本は最早之を度外視することは出来ませぬ。蓋爾たる小國を以て清露の如き大國に勝ちし原因に注目するやうになりまして、日本に關する歐洲人の研究心を呼び起したのであります。西洋の學者は研究法が勝れて居りますが故に、文學言語が十分解せられなくてもその一斑を知れば、良き研究法を利用して全豹を推論することが中々巧妙であります。それで今や日本の事にも頗る通するやうになつたのであります。

ライン氏は日本に來たことのある人でありませんが、氏は我國の言語文章に通せざるに拘らず、「日本」と稱する二冊の著書を獨逸に於て發行し、當時オーソリチーとして尊重せられたのでありましたが、是は地理地質動植物等を研究したものでありまして、是等は科學者にとりて爲し易きことで文學などを研究することの困難とは同一の論ではありませぬ、それで氏に先ちてこの方面の研究をした人にシーボルトといふ人などもあります。又美術の如きも目で見ればわかるものでありますから、これも早く西洋に紹介せられたのであります。然しながら日本の事を眞に解しようとするには其文章言語に通じなければなりません。例へば國家の根本的組織の如きは容易にわからないのであります。憲法だけでも大體わかるやうなものゝ、其斯の如き政體となり、其維持せられ發揮せらるゝ大精神に至つては容易にわかるわけのものではありませぬ。日本人自身にとりても猶ほさうであります。憲法を解釋するには西洋の憲法からばかりでなく、日本の歴史からも大いに考へなければなりません。國體の成立する所以の精神に關する完全の解釋は極めて少くありますので、徳川時代には殆んど無かつたと申してもよろしい。明治になりまして猶ほ其説區々たるを免がれないのであります。私は桐花學會には關係はありませぬが、日本の國體を研究することは宜しいことと思ひます。國體につきて謬る者、迷ふ者のある世でありますから、之に關して根本的大精神を闡明することは重要な研究問題であります。二三の新聞に記してある如く、日本の國體は最早研究を要しないといふ程までにその根本は一般に明瞭となつて居りませぬ。日本

の國體は餘程玄妙にして日本文明の基礎となつて居りまして、若し此國體を取り除くならば日本の文明は決して生ずる筈のものでありませぬ。又其國體は神道とも密接の關係があります。其精神的方面は一方神道として宗教方面に發達し、他方面には國體を發揮せしめたる根本動力となつて居ります。若し神道なくんば國體を維持することは困難であります。我皇室が萬世一系にして、他國に類なき斯國體は神道の扶翼によるとは少くありません。又神道は萬世一系の皇室に負ふところ多いので、兩々互に相待つて存續發展するもので、各孤立しては大いに困るのであります。皇室は神道の中心點でありまして、又神道の宗教としての力は萬世一系の皇室に負ふところのあることは、研究すればするほど益々明瞭となるのであります。加藤君のお説の如く神道は色々に考へることが出來ますが、決して單に儀式丈に止まらず、立派に宗教であります。又神社としての神道と宗教としての神道とを區別するは行政上必要ではありませんが、神社は宗教の重大の機關であります。神道は國體と關係して萬世一系の皇室を戴くといふ世界に比類なき特色ある國體を成し、國體と神道とは互に密着せるものであります。神道は佛教や耶蘇教に比すれば、現今の有様にては進歩の程度劣るやうに見えますが、之を高尙に考へますと法學博士克彦氏の考へらるゝやうにも考へらるゝのであります。勿論それは同氏の一家言ではありませんが。……

此の如く高尙にも考へ得るのであります——同氏の説の當否は別として——、即ち神道を進めて行くことは國體の發揮上至大の力であります。國體の意味を明かにせんとせば神道を離れては出來得ないの

であります。國體の淵源は天照大神の神勅にまで遡らなければならぬのでありまして、之を取り除いては國體を説明することが出来なくなるのであります。西洋人が單に日本に来て人力車から美術動物植物都會地理地質神社を見たのみでは國體のことは分らないのであります。神道の本質歴史教義を明らかにせざれば不可能であります。然るに日本人は外國の研究に急にして、日本の精神の研究を忽にする弊がありまして、燈臺下暗は日本學者の通弊であります。さればとて古風の研究方法では間に合はないので、今日の進んだ方法を探らねばなりません。然るに神道の研究に於ては其歴史すら出來て居ない、佛敎のは不完全ながらあります。日本に於ける神道の位置は猶は支那に於ける道教、印度に於ける印度敎の如きもので、道教は支那民族固有の宗教思想で撲滅することは出來ませぬ。儒敎は宮廷學者紳士等上流の間に行はるゝも、民間には概ね道教が行はれて居ります、道教は古いのみならず、今日では佛敎を壓倒する勢があります——少くとも佛敎と對峙する程支那では盛んであります——又印度敎は婆羅門敎の繼續者で印度民族の思想で同國一般に信せられ佛敎は却つて今は支那日本等の外人間に信せられて居ります。

神道は日本民族固有の思想なればこそ、佛敎入り來るも滅せず、耶蘇敎入り來るもの絶えないのであります。日本から神道を取り除くといふことは日本人そのものを取り除くといふことになるのであります。故に日本の特色を研究せんとせば、佛敎よりも儒敎よりも耶蘇敎よりも眞先に神道を研究せねばな

りませぬ。そは之が日本の基礎的のものであるからであります。之を政治方面より觀れば即ち我が尊嚴無二の國體であります。憲法の條文のみでは到底其眞意を解することが出来ないであります。然るに現今往々之を無視する傾向がありますから、大いに心を茲に致さねばなりませぬ。外人は之を研究せんとする心がありまして外部より見たるのみでは我臣民の帝室や神明に對する觀念は、元來之を有せざる彼等には了解し難いのであります。かの歸化人ハーン即ち小泉八雲氏の如きは日本にあること年久しく、且非常の同情を以て、之を研究せられましたが、同氏并にゴルドン夫人も日本の言語文章に通じてゐないところから往々そのいふところ隔靴搔痒の感あるを免かれないのであります。されば加藤君の説の如く、精神界の事は日本人自ら之を研究して外人に分明ならしむるやうにせねばなりませぬ。是れ私の大いに本會に賛成する所以であります。

佛教が日本の發展を種々の方面に於て補助したることは既に加藤君の説かれたるが如くであります。藝術方面のみにても、佛教の無かつた以前は原始的のもので、觀るべきもの殆んど無いといふ有様で、繪畫彫刻建築等は直接間接に皆其御蔭を蒙つてゐます。獨り徳川時代の浮世繪は直接佛教に關係なきも、本邦繪畫の發達して此新派を出すに至つた所以を思へば、間接に其恩澤を受けたものと申しても差支ないであります。其他の美術は大部分佛教の影響を受けたるのみならず、僧侶自ら之を傳へましたので、其文學思想に及ぼせる感化の大なるは申すまでもないことであります。又案外神道に影響を與へて居り

ます神道は其教理の佛教に負ふところ少くありません。兩部神道、唯一神道皆其影響であります。佛教も亦他方に於て神道の影響を受けて、日本化され、神道化されて居ります。蓋し境遇に適應し日本民族の精神に合はなければ榮えることが出来ない爲めであります。即ち其輸入の始めは神佛の衝突もありましたが、復た兩々相並びて悖らず、遂に密接になるに至つたのであります。物部對蘇我の争に次いで、聖德太子十七憲法の第二條に篤敬三寶の告諭見え、其後天臺の傳教、眞言の弘法等も佛教をつとめて日本化せんとしたればこそ、山王實一神道や本地垂迹説も起るに至つたのであります。更に降つて眞宗の親鸞や日蓮等も大いに日本化せんとするに努力したので、親鸞は佛教を國風に適せしめん爲めに大英斷を以て印度佛教の禁戒たる肉食妻帯を許しました。蓋し印度にても或三種の淨肉——自ら殺さず人から貰つた肉の如き——は除外例として食ふことを許し、又釋迦も入滅前或所で豚肉を食べた特例もありましたが、女犯は梵網經等に於て嚴禁されてあるに拘らず、親鸞は之を破毀して一般に肉食妻帯を許した所以のものは佛教も日本に來つては印度のものその儘にてはいけぬ、日本化せざるを得ざることを看破したるためと思はれます。又日蓮の宗派は日本を大黒柱として出來たるもので、日本を根柢として世界を統一せんと欲する抱負があつたのであります。故にこの二宗は後世最も我日本で繁榮してゐる次第であります。然るに其の本國の印度にありては一時は廣く布かれましたが、終に中央に勢力を失ひて僅かに邊隅に餘喘を保つのみで、印度教、回々教、拜火教等の爲めに其勢力範圍を奪はれたのであります。又

之を輸入した支那に於ても、六朝より隋唐迄は盛んで、之を百濟に傳へ、百濟より更に傳來したのであります。後には直接に大乘佛教を支那より輸入しました。宋代より後は我國に輸入せられたるは禪宗のみであります。また支那の佛教は日本に傳はりたる後自國にては却つて衰微しました。

斯の如く本家たる印度並に取次たる支那に於て佛教の衰微したるに反して、佛教は日本に於て其粹を遺しました。即ち其高尚なものは日本に最も多く有るのであります。日本は佛教を同化淘汰して其粹のみを取り、自家の營業分として發達せしめ、種々の方面に其効力を發揮せしめたのであります。藝術の方面は既に陳べました故再説しませぬが、武士道方面に於ても、佛教は其發達に非常の力がありました。蓋し武士即ち其前身物部氏等は始めは之に反對して敬神愛國を唱へましたが、佛教が神道と融和するに及んでは、却つて佛教は武士道の有力な援助者となりました。彼の賴朝が武士道を奨励する精神的方針として、佛と神とを尊敬せしめ、又其頃の豪族は佛像を護符として之を身につけて戰場に出で、鎌倉時代より南北朝時代室町時代に至るまで、武家は賴朝を模範としたれば彼等は神佛の信仰によつて其武士道修養に資して居つたことは知るべきであります。特に此時代に盛に渡來せし禪宗は直截簡明に頓悟を主とする佛心宗であつて、視死如歸武士道と最もよく適合するところより禪宗は盛に武家に信せられて、益勇往邁進の氣象を涵養したのであります。然るに足利氏衰へて尾大不掉の爲め英雄所在に蜂起し戰亂の世となるに及んで武士道は益々其光を放ちました。然るに是等の將士多く御神佛を尊び、中には自ら

入道するものも少くなかつたのであります。徳川氏の始めに當りまして、天下既に泰平に歸し、武士道は武士間の教育によつて傳へられました。佛敎特に禪宗の之に大關係ありしことは前時代に譲らぬと申して過言でなからうと思ひます。今二三の例を挙げますと有名なる山鹿素行は黄蘗宗の僧隱元に參じ死後曹洞派の禪寺に葬られてをります。其師北條安房守も禪學に通じて居りまして、此安房守氏長と師弟の關係ある宮本武藏は兵法と劍術とを交換傳授した人であります。彼は六十餘度の眞劍勝負に一度も不覺を取らず、其擊劍の術まことに天下に冠たる有様でありましたが、これも參禪以て精神を修養したる結果であらうと思ひます。明治の眞武士にして劍客たる山岡鐵舟氏の禪機に通じて居つたことは猶ほ世人の耳目に新たなる所でありまして、皆劍と禪との一味一致を證すべきものであります。乃木大將も東郷大將も皆參禪されたのであります。そこで若し禪なくんば武士道の發達のかくの如く盛なる程度に至ることは覺束なかつたであらうと思はれます。何となれば大伴氏物部氏并びに其部族の、天孫降臨と共に持ち來つた、「大君の邊にこそ死なめのどには死なじ」とか、「額に矢を受くるも背に受けじ」とか、いふ忠勇無双の大精神は我國民固有の根本思想であります。唯これのみにては後世諸事複雑となり行くに處して、宜しきを得るに或は困難の場合なきを保しがたいのであります。然るに幸に佛敎の禪を利用して之に臨み、活殺自在の精神と伎倆とを養成することが出來たのであります。

然れども單に佛敎のみで神道を除却したならば折角の修養も我國に對しては無意味となるのでありま

す。何となれば斯る修養も又練磨されたる眞の武勇も、萬世一系神明の御裔にして兼ねて現人神たる天皇の御爲に盡す信仰がありませねば、到底金甌無缺の國體を有史以前即ち神代より今日までも維持し、向後益々發展せしむることは出来ないからであります。如斯日本人は佛教の善き所を採つて武士道の營養物としたものであります。

こはたゞに佛教のみならず、之と同じく百濟を経て傳來せる支那の儒教に對しても亦同様であります。即ち我國人は其善所を取り、我に不適當な悪い部分は棄て、しまつたのであります。孟子の放伐思想に對する其取捨の如きは適例であります。即ちかの堯舜仁義説は採用しましたが、湯武放伐論は棄て、しまつたのであります。又我國儒教の學風も始めは漢唐の訓詁派でありまして、信仰は神佛と互に調和して反撥せず、王朝時代の大儒菅原道眞、南北朝の北畠親房、足利時代の一條兼良等は皆さうでありました。徳川時代には宋朝の性理學派入りて儒者の多くは排佛毀釋に傾くやうになりましたが、其初期には其等の徒も實は佛教の教育を受けて之を素地としたものであります。藤原惺窩、谷時中、山崎闇齋の如きも皆幼時僧であつたのであります。又佛教の彼に衰へ我に盛なりし如くに、儒教も亦日本に興隆すると同時に支那には漸々衰へまして、朱子學陽明學の如きは彼に於て精神亡失し、特に清朝の考證學の盛なりしと互に因果關係をなし、終に儒教の精神亡びると同時に清朝も亦命脈を失つたのであります。

朱子學派に於ては、清朝には偉人が出なかつたのであります。我徳川時代には人材輩出し

て、特に王陽明學派に偉いものがあつたので、維新前後の大立物、高杉、西郷等は實に其流を汲んだ者であります。水戸學派は多く朱子學でありましたが、普通の腐儒のやうに其學に拘泥せずして、我國固有の大和魂を以て、神道更に廣くいへば我國體に結び付けましたから、之が尊王攘夷説の源泉となりまして、明治中興の大業の原動力となつたのであります。

頼山陽の如きは固より水戸には關係ありませんが、その學術思想の徑路は略ぼ之に似たものがありました。

斯の如く我民族は同化力強く、採長補短に長じてゐますが故に、外來の儒佛も皆粹のみを抜きて、我國體の營養物としたのであります。かく種々複雑した微妙の國民思想は容易に西洋人に了解出來ませぬ。彼等は日清、日露の役以來突然我が偉大なるに驚きよして、僅々五十年の西洋文明の吸収によつて、斯の如くなりたるものと皮相の見を下し、奇蹟の如く思ふは無理ならぬことであります。蓋し彼等は我國民の同化力絶大にして、往時既に支那印度の文明を咀嚼消化し、儒佛の粹をとり、益々根幹を強めて置いたものでありますから、今度西洋文明を輸入して、之に接しましても其國本少しも動搖せずして益々繁茂するとは當然の理たるを知らぬからであります。この絶大の同化力統一力は世界無比であります。歐米諸強國には斯の如きものないではありませんが、到底我が強盛永續には及ばないのであります。故に古の羅馬を始め政體國體變更して興亡常ならぬ有様であります。況んや支那朝鮮安南等東方諸國の固より

類を同うすべきではありません。布哇の如き固より弱小のものではありませんが、此も外來文明に負けて亡びたのであります。其他斯の如く外來の文明に接觸し、摸倣して却つて衰弱して亡國となり行くもの多き中に於て、我國の獨り歐米人とは異なる人種でありながら其文明を攝取し益々偉大となり行きますのは我國民固有の統一力消化力の絶大なるが爲めであります。我祖先は既に之を東洋の印度支那の文明學術宗教に對して之を示し、我輩現代人も亦西洋の文明に對して同一の力量あることを試験されて及第致しましたることは、固より當然の事ながら痛快でありまして意氣軒昂、前途益々有望の事であります。二十世紀に於ける日本の勃興は要するに古來民族固有の消化力統一力自我力の發揮でありまして、若し此力がなくして外來の文明を攝取するのみにては食傷して死亡あるのみであります。かの維新の際一時排佛毀釋のありましたのは、前述の事と矛盾するやうでありますが、是れ國家危急存亡の時にその緊張を極めたる自我觀の自然溢流せるためであつたのであります。それで外壓減じますれば平靜に歸して、今や益々之を重要視するに至つたのを見ましても矛盾でなくして、却つて國民性の微妙の働をこゝに見ることが出来るのであります。

我國民は國家の危急存亡の時に臨みますれば、必ず我國體は天壤無窮のものにして、萬世一系の皇室のみ此土に君臨あるべき神勅を信仰し、自覺し、實現したればこそ神代より幾千幾百の波瀾を經過しても益々鞏固隆盛に進んで参りましたので、實に天祖の神勅の大威嚴は宇内無比でありまして、従つて之

を奉ずる國民も世界に類なく、一回も革命亡滅の厄に罹らなかつたのであります。若し此信仰心なく、此自覺なくんば如何に憲法は完美してゐましも、一種の個條書たるに止まり、少しも力がないのであります。

之を要するに我大日本の使命は此鞏固なる國體を基礎とし、絶大の消化力を以て世界的統一を成就するにあるのであります。して此消化力を盛んならしめ、外來の攝取物を多々益々辨じて食傷せざらしむるためには、我國體の尊嚴無比なるを深く自覺せねばなりません。それには我國體の根本思想で武士道の源泉なる神道を研究して、之を歴史的事實に徴し、之を闡明確證し且つ益々其發展を圖らなければならぬのであります。かういふ事は如何に西洋人が巧妙に熱心の研究を以つてしても前陳の如く言語文章上の困難は勿論、國民思想の全然異なる點から到底其真相を看破し難く思はるゝこの我建國思想を彼等に了解せしむる重要な結果が意外にもそこに副産物として出て來るのであります。

故に本會員諸君が明治大帝の聖徳を記念し奉る爲めに此學會を起し、神道を始め儒佛二教等凡て日本の精神的文明を研究し、之を海の内外に周知せらるやうに努めらるゝのは、實に目的の遠大なるのみならず、又目下緊急の要務と考へらるゝのであります。

今又翻て現今の教育を觀ますに非常の缺點があります。それは歐米の事のみ盛に研究しますが、却つて祖國の事を忽にするといふことであります。其結果往々歐米に心酔して、我民族固有の元氣の漸く喪

失しつゝあるとであります。蓋し他國に類なき尊嚴なる國體であるといふ自覺あればこそ勇猛心も生ずるのであります。されば教育の缺點を補ふ點からいつても益々此學會の必要がわかるのであります。

基督教も近來餘程國體に同化して來ましたが、中には十分日本化せぬ者のあるのは、日本の事を知らぬ宣教師などの立てた宗教學校などで外國其儘の教育を受けたのも與つて力あつた爲めと思はれるのであります。然るに日本人は是迄儒佛を國體化して其粹をとつて來たのでありますから、耶蘇教も亦さう行かねばならないのであります。然し之をなすには國體國情を了解し以て國家の統一力を盛にせねば國家も終に解體せざるなきを保し難いのであります。統一力盛なれば外來思想に對しても勿論其粹を攝取して日本の文明を資益することが出来るのは初め儒佛に對せしと異なることがないのであります。然し耶蘇教は其輸入の時機と事情とに於て儒佛兩者と相違があることを注意せねばなりません。即ち儒教の本家は唐時分迄は強く日本は朝鮮に於て之と戰つて敗れた程でありましたけれども、其後先方は衰へて日本は強くなり、又支那は武力のみならず精神に於ても益々衰へ明清と時代を降るに従ひ益々精神的に弱くなりましたから、我邦は之れに對して何等の顧慮も要しないで儒教の教理のみを自由に攝取することが出來ました。又佛敎の本家印度は非常に遠く政治上何等の關係もなかつたのみならず、其國力並びに精神力の消耗喪失は支那よりも層一層劇しかつたので、之も亦佛敎採用に際して顧慮するに足らなかつたのであります。

然るに耶蘇教の本國猶太國は非常に早く亡びましたけれども其教は諸方に傳播せられ、其我國に輸入し布教せらるゝに至つたのも歐米の文明諸強國の勢力を負つて、種々に歐米文物と共に入り來つたものでありますから、こゝは大に注意して外國直譯の耶蘇教に心酔してはならないのであります。故に我民族固有の精神を明らかにし、其絶大の統一力を發揮し、十分此教を咀嚼し、其粹のみを攝取することをつとめ、輕々しく之を嚙呑に嚙下するは宜しくないのであります。民族として統一が盛なれば外來の文物思想皆取つて我營養物となすべきであります。然らざれば西洋文明に附隨して入り來るパチルスに犯され、極端なる社會主義の如き危險極まるものが這入つて來る恐れがあるのであります。

如斯外來の文明を消化するには自我心の盛なるを要するので、其盛なるを致すには其民族固有の思想を明らかにし、國體の永久不變の真相を識りて、自覺心を起さしめなければなりません。

前述の如く目下日本文明の研究は各方面より見て必要でありますので、此の如き目的を以て起される此學會に出て何かと思つて御話しましたが、廣大なる問題となつて、時間乏しく單に其一斑を陳ぶるに止めました。尙ほ十分諸君の御批評に接したいのであります。

月花をわれもあはれとみてはあれど

あはれと歌ふときなかりけり

(平田篤胤)